

空中ブランコ乗りのキキ（別役実）

伴 太貴、白井 沙也加、林 禎之、吉田 衣織

一 作者と作品について

別役実は、一九三七年に旧満州（現中国東北部）に生まれる。終戦と同時に日本に引き揚げてくる。長野北高校を卒業し、早稲田大学政治経済学部に入學。ベケットらの不条理劇に影響を受け、鈴木忠志らと劇団早稲田小劇場を創設。在学中に『AとBと一人の女』など数々の戯曲を発表する。大学中退後は土建一般労働組合の書記としてサラリーマン生活を送りつつ、喫茶店で演劇の作品を書き続ける生活を送る。戯曲『象』（一九六六年）で注目され、『マッチ売りの少女』（一九六六年）『赤い鳥の居る風景』（一九六七年）で第十三回（新劇）岸和田國土戯曲賞を受賞。一九七一年、『街と飛行船』『不思議の国のアリス』で紀伊國屋演劇賞受賞。同年『そよそよ族の叛乱』で芸術選奨新人賞、一九八七年に戯曲集『諸国を遍歴する二人の騎士の物語』で読売文学賞、一九八八年、『ジヨバンニの父への旅』で芸術選奨文部大臣賞を受賞。二〇〇七年、劇作百三十本を達成する。戯曲や童話の他に、生物学の常識を覆す奇書のふりをしたジヨークエッセイ『虫づくし』をはじめ、日本古来、および現代の妖怪の生態を解説した『もののけづくし』や、『けものづくし』『鳥づくし』『魚づくし』など「〜づくし」シリーズは、ナンセンス作家としての著者を一躍有名にした。また衝撃的な事件の闇に包まれたメカニズムを鋭敏な目で分析した犯罪エッセイ、「犯

罪症候群」などの独創的な論考も発表する。二〇〇三年から二〇〇九年までは兵庫県にあるピッコロシアターに併設された兵庫県立ピッコロ劇団の代表を務めていた。二〇一三年には芸術院会員に選ばれる。

『空中ブランコ乗りのキキ』は、三省堂の『現代の国語1』にて取り扱われている教材だ。原本は一九七五年の『黒い郵便船―別役実童話集』（三一書房）に収録された「空中ブランコの子供のキキ」である。元々はNHKの子供向け番組「おはなしこんにちは」のために書かれた話で、一九七四年日本放送出版協会によって「NHKおはなしシリーズ1 空中ブランコの子のキキ」という絵本が出版された。翌年にはこの絵本を大村はまが作文指導の教材として用いたという実践報告を出し、そ



の後一九七八年にはじめて教科書に掲載された。

二 叙述について

そのサーカスでいちばん人気があったのは、なんといっても、空中ブランコ乗りのキキでした。

「その」から物語を始めることにより、読者に如何様なサーカスであったか興味を持たせるとともに、素早く物語に引き込む効果を發揮している。また、「なんといつても」は「特に」と同様の意味である。当該表現独特の効果としては、直後の名詞へと読者の目を引く働きがある。聴覚的視点においても、一呼吸おくことで、次の言葉への注意が促される仕組みになっている。最後の「でした」は、完結した物語を今から紡いでいくのだという予感を読者に促す。

まるで鳥みたいじゃないか。

キキの空中ブランコを見て、観客の一人がした発言。「まるで」と「みたい」が綺麗に呼応することで、キキが本当に鳥であるかのように感じたその感情が読み取れる。また、「か」で文を締めくくることにより、感嘆を漏らす観客の姿が想像できる。

人々はみんな、キキの三回宙返りを見るために、そのサーカスにやってきました。

「人々は」の直後に「みんな」と挿入することにより、実に多くの人々であったことが窺い知れる。人々は、「キキ」をではなく、あくまで「三回宙返り」を見る為にサーカスへやってきていることが分かる。

「なあ、キキ……。」

「なあ」と呼びかけることにより、何か話を切り出そうとしている印象が与えられる。突然結論から話し出している訳ではないので、緊急的な連絡ではないことが分かる。また、「……」は、発言の躊躇いか、或いは話者の感慨に耽った様子かのいずれかを表す。この場合、直後の会話文の脈絡を見ると、肯定的なそれであることから、後者の判断となる。つまり、キキのサーカスに対する貢献について、感慨深く思う団長の気持ちが表されている、ということである。

「だってどこのサーカスのブランコ乗りも、二回宙返りしかできないんだからね。」

この前文においてキキを「世界一」と評しているのは、ただのおだてや励ましとしての発言ではなく、あくまで根拠を持って話していることが、「だって」という表現から読みとれる。ここでの根拠とは、「どこのサーカスのブランコ乗りも、二回宙返りしかできない」ことである。すなわち、団長がキキの存在意義を肯定する材料としては、専ら宙返りの回数であり、読者も、無意識のうちに、キキのアイデンティティは三回宙返りをする事であると刷り込まれる仕組みとなっている。

「心配しなくてもいい。誰にも三回宙返りなんてできやしないさ。それに、もし、誰かがやり始めたら、おまえさんは四回宙返りをしてみせればいいじゃないか。」

団長がキキを励ますために言った言葉である。団長は、キキの実力

を認めており、キキに信頼をおいているのだが、キキの抱える悩みには鈍感であり、キキの本心を理解していない。「三回宙返りなんて」という所で、他のサーカスのブランコ乗りが二回宙返りしかできないのに、三回宙返りをするキキを高く評価するとともに、「四回宙返りをして見ればいいじゃないか。」と言うところから、キキへの期待がとても大きいことが分かる。しかし、団長の期待しているのは、キキのブランコの演技への期待というよりは、三回転、四回転宙返りへの期待であるということがこの文で読み取れる。

「四回宙返りを？できませんよ。練習してみました、三回半がやっとなんです。本当に、鳥でもないかぎり四回宙返りなんて無理なんです。」

「四回宙返りを？」というところから、まだ三回宙返りも自分以外にできる人がいないのに、四回宙返りを求められていることに対して、一度耳を疑っている。「できませんよ。」というのは、自分の現時点での実力ではできないという意味があるとともに、四回宙返りを求められていることに対しての驚きから反射的に否定したという様子も窺える。「本当に」というところで、四回宙返りができないことを念を押して否定している。「鳥でもないかぎり」から、四回宙返りがいかに難しいものであるのかということとを比喻を使って表現している。「無理なんです。」と断定していることから四回宙返りを求められたことにたいする強い反発が窺える。

キキは、人々の評判の中で、いつも幸福でしたが、誰か他の人が三回宙返りを始めたらと、考えると、そのときだけ少し心配になるのです。「いつも幸福でした。」から、キキは普段三回宙返りをして人々から

歓喜されることを幸せに思っていることが分かる。しかし、「人々の評判」というものを意識するあまり、ただ一人だけ三回宙返りができるということにこだわり、三回宙返りをできる人が現れると自分の評価が失われるのではないかと危惧している。「そのときだけ少し心配」から、いつもは三回宙返りをする事によって安心した状態を得ていることがわかる。

「そのときは、団長さんの言うとおり、四回宙返りをしなければいけないのだろうか・・・。」

キキは、四回宙返りは不可能であると考えているが、求められた時には人々の期待に答えてやらなければいけないだろうと考えている。ただ文末に余韻を残すことから、人々の期待に本当に答えるべきであるのか疑問が感じられる。それは、人々の評価が「四回宙返り」という行為に対して向いているのであって、キキの演技自体の評価でないとすれば、実際に不可能である四回宙返りに挑戦する必要があるのかという疑問であると推測する。しかし、ここではやはり答えるべきであるという意味が続くのではないか。

「四回宙返りなんて無理さ。人間にできることじゃないよ。」

この文は、練習を見に来たピエロの口口がキキに言ったものである。前述に「およしよ」とあることから、キキのことを不安に思っていることが分かり、「なんて」から四回宙返りが到底できないことを示唆している。語尾に「さ」をつけることにより、言葉を和らげ、キキを諭すような働きかけをしている。「人間にできることじゃないよ」から、口口が四回宙返りを不可能であると捉えていることがわかる。

「でも、誰かが、三回宙返りを始めたら、私の人気は落ちてしまうよ。」

「誰かが」の後に句読点を打つことにより、その言葉を強調させている。キキは、自分の人気は自分しかできない三回宙返りができるとにあり、三回宙返りを誰かがやってしまうと自分の人気は落ちてしまふと思っっている。この文から、キキは自分の人気が「三回宙返り」ができることにあると思っっていることが分かる。

「いいじゃないか。人気なんて落ちたって死にやしない。ブランコから落ちたら死ぬんだよ。いっそ、ピエロにおなり。ピエロなら、どこからも落ちやしない。」

この文は、ロロがキキに言った言葉である。「人気なんて落ちたって死にやしない。」という言葉から、ロロは、キキの人気はただ一人「三回宙返り」をできることであることを認めている。「ブランコに落ちたら死ぬんだよ」というのは、同じくブランコ乗りであったキキの父がブランコから落ちて死んだことから、キキにブランコの危険を訴えている。

「人気落ちるといふことは、きつと寂しいことだと思ふよ。お客さんに拍手してもらえないくらいなら、私は死んだほうがいい……。」

「きつと……だと思ふ。」というところから、人気落ちるといふ未経験の体験を何となく想像している。また、断定していないことから、ロロがキキの人气が落ちると認めたことに対して、どこか認めたくないといった思いがある。「お客さんに拍手してもらえなかったら私は死んだほうがいい……。」から、キキの人々からの評価に対する執着が感

じられる。文末に余韻を残していることから、様々なことが考えられる。行き過ぎた言動に対しての少々の沈黙、この余韻で何かを決意している、本当にそうなのかという自問自答などが考えられる。

「そうですか。惜しいことをしましたね。今夜は、特にうまくいったんです。飛びながら自分でもまるで鳥みたいだっと思えたくらいなんですからね。」

「惜しいことをしましたね。」から、どこかやせたおばあさんに対して少し見下した様子が窺える。「今夜は、特にうまくいったんです。」とキキは我ながら絶賛している。鳥を比喻に使い、おばあさんにすごい飛びであったことを自慢している。

おばあさんは、あいかわらずシャボン玉を吹きながら、遠くカーニバルのテントの建ち並ぶ辺りですいたり消えたりしている赤や青の電気を見ておりましたが、急にキキの方に振り向いて言いました。

最後の「急にキキの方に振り向いて言いました。」から、キキの言っていることを上の空で聞いていたように見せかけて、しっかり聞いていたことがわかる。わざわざ振り向いて言うということから、おばあさんはこれから言うことに対して、キキに伝えたい内容であることが分かる。

お前さんは知っているかね？

何を知っているのかがこの段階ではまだ明らかにされていない。後の「今夜、この先の町に……」という部分と呼応して、倒置法的な文章の置かれ方がされている。先にこのセリフを置くことで、その内容に

読者を引き込む効果があるのではないか。

本当ですか。

この時キキはまだ金星サーカスのピピが三回宙返りに成功したことを知らない。この言葉の裏に、真偽を問う気持ちと、驚きや衝撃的な気持ちを読み取れる。どちらかといえば、前者よりも後者の意味合いの方が強いように感じる。驚きと衝撃とにより条件反射的に出た言葉か。

また、この日が来るのが以前からわかっていたと捉えれば、「どうとうその時がきたか」という気持ちの表れとも読める。

どうとう成功したのさ。みごとな三回宙返りだったそうだよ。

「どうとう」から、今まで失敗を重ねてきたがついに、というニュアンスが生じる。失敗してきた期間が長いことを示唆するような書き方。「〜そうだよ」とは伝聞の表現。ここから、このおばあさんが直接ピピの三回宙返りの成功を見たわけではなく、誰かほかの人からその情報聞いたということがわかる。

そうですか……。

「……」の後に、隠れたキキの気持ちを読み取れる。文脈から判断すると、ここには「どうしよう」「ついにやったか」といった焦りの気持ちが表示されていると考えられる。

おまえさんの三回宙返りの人気も、今夜限りさ……。

「も」は事柄が並立しているときに使う助詞。ここでは「三回宙返

りの人気」と「キキの所属するサーカスの人気」が並立している。キキの所属するサーカスでは、空中ブランコ乗りのキキの三回宙返りが人気だったと物語の冒頭で述べられている。ここから、キキの人气がサーカス全体の人気につながっていると考えられる。よってキキの人气が落ちれば、サーカス自体の人气や評判が落ちることになる。これを助詞「も」によって表現していると考えられる。

また、「も」については、キキの他にも今まで人気を失ってきたブランコ乗りがいたことを連想させ、キキもその一人となる、という意味合いで使われている「も」であるとも捉えられる。

そうですね……。

「そう」は直前のおばあさんのセリフの内容を受ける。自分以外の人が三回宙返りに成功すれば、自分の人气が落ちるということを理解しており認めている。「……」の後には、焦りと困惑が隠されている。

キキは黙ってぼんやりと海の方を見ました。

「黙って」から、これまで頭では分かっていたながらも、事実を認めるのを避けておばあさんに反論していたキキが、事実を認めたことを示唆する。「ぼんやりと海の方を見」たことから、意図的に海を見たというのではなく、何か考え事をしながら視線が海の方向いたということを表している。視線が何かに注がれているわけではない。

しかしまもなく振り返ってほんのちよつとほほえんでみせると、そのままゆつくり歩き始めました。

「まもなく」は基準となる時点からあまり時間が経たないうちに、

という意味。ここで言う基準とは前文の「ぼんやりと海を見」たとき。「ほんのちよつと」から、はつきりとは見えないほどの笑みであることがわかる。さらに「みせる」とあるので、挨拶や会釈の際にするような口角を少し上げる程度の作り笑いか。少なくとも喜びや嬉しさがあつたわけではなく、意図的にほほえんだことがわかる。「そのまま」とあるので、ほほえむという動作と歩く動作が一連の流れになつていくことがわかる。おばあさんからの何かしらの反応を求めているわけではなく、「ゆっくり」からは、急いで立ち去るというわけではなく、不動の決心が読み取れる。ここでの決心とは四回宙返りをするということ。

いいんです、死んでも。

通常の文章ならば「死んでもいいんです。」となるところを、敢えて倒置法を用いて逆にするので、言葉に重みを与えている。キキの並々ならない決心が表れている。キキにとつて人気が落ちることは死ぬことよりもつらいことだということがわかる。

おまえさんは、お客さんから大きな拍手をもらいたいという、ただそれだけのために死ぬのかね。

「ただそれだけ」から、おばあさんがお客さんから大きな拍手をもらうということを軽視していることがわかる。おばあさんにとつては大きな拍手をもらうことは死ぬことよりもずっとつまらないことだということがわかる。大きな拍手をもらうことより、生きていることの方が大事だと思つている。

そうです。

キキにとつては、大きな拍手をもらえなくなることは死に値することであることがわかる。拍手をもらうことは生きていることよりも価値があることだと捉えているようにとれる。

いいよ。それほどまで考えてるんだつたら、おまえさんに四回宙返りをやらせてあげよう。おいで……

ここに出てくる「いいよ。」は許可ではなく理解を示すことば。「わかつたよ」と同等。「やらせてあげよう。」からこのおばあさんにはなにかしらの能力があることがわかる。おばあさんが魔法使いなのかという疑問を読者に与える効果がある。「……」からあやしいな雰囲気がついてくる。そのような効果を狙っているのか。

おばあさんは、かたわらの小さなテントの中に入り、やがて、澄んだ青い水の入った小瓶を持って現れました。

「かたわら」は、側の・すぐ近くの意味。キキたちが話していた港の一角に小さなテントがもたらあつたことがここで明らかになる。「やがて」はまもなく・じきにという意味。テントに入つてすぐに出てきたと思われる。魔法使いの小屋のようだ。おばあさんが持つてきた小瓶の中身が、キキに四回宙返りをするための能力を与える薬であることがわかる。「現れる」とは、今までなかったものが姿を見せるといふ意味がある。したがつて「現れた」という表現からは、おばあさんが急に姿を見せたような表現がなされており、彼女が人間ではないかのような雰囲気を感じ出す効果がある。

町の人々は一斉に口をつぐんでしまいました。

「一斉に」とあるので、意図せずとも皆その瞬間に黙ったということがわかる。皆が一気に黙ってしまうほど、四回宙返りは人間離れしたすごい技だということがわかる。また、皆が人間にできるはずがないと思っっているということもわかる。

音楽が高らかに鳴って、キキは白鳥のように飛び出してゆきました。

「白鳥のように」という表現から、キキが美しく優雅に飛び出していったことを読者に連想させる。「飛び出していく」から、キキは勢いよくテントの陰から出て行ったことがわかる。ここでキキが白鳥のようだと例えるのは、この物語の結末への伏線になっていると考えられる。

テントの高い所にあるブランコまで、繩ばしごをしようと登ってゆくと、お客さんにはそれが、天に昇ってゆく白い魂のように見えました。

「するすると」という表現があることで、キキが簡単に、かつ素早く、身軽に高い位置にあるブランコまで登って行ったことがわかる。

「天に昇ってゆく白い魂のように見え」と書かれているのは、物語の結末への伏線となっているように思われる。キキが死を覚悟しておばあさんからもらった薬を手に、四回宙返りに挑戦するということを一切知らないお客さんに、キキが「天に昇ってゆく白い魂のように」見えたということは、それほどキキが人間離れした身軽な動きをしていたということであろう。また、キキの四回宙返りに対する執着心や成功への強い気持ちが外に表れていたことを表す一文とも取れる。

見ててください。四回宙返りは、この一回しかできないのです。

一見、観客へ向けた言葉のように思えるが、この前文に「心の中でつぶやきました。」とあるため、これはキキの心内語であることがわかる。すると、この言葉は、観客に向けての言葉でもあり、キキが自分に言い聞かせている言葉としても捉えられる。特に「この一回しかできないのです。」という部分からは、一回成功させれば、自分の命も終わりであるということ自分を言い聞かせているようである。そして、最後の覚悟を決めていると捉えられる。「見ててください」からは、四回宙返りを必ず成功させるという強い意志が表れている。

ブランコが揺れるたびに、キキは、世界全体がゆっくり揺れているように思えました。

「思える」というのは自然とそう思うことができる、自発の意味がある。一回きりの四回宙返りをするという意志は固まっているものの、無意識のうちにキキの心が揺れ動いている様子や、キキの最後の躊躇を揺れるブランコと重ねることができる。

しかし、次の瞬間、キキは、大きくブランコを振って、真っ暗な天井の奥へ向かって飛び出していきました。

「しかし、次の瞬間、キキは、」と読点で細かく区切ることで、直前の「ぼんやりと」と対照的な印象を受け、一気に事が展開していく様子を表す働きがある。また、この文を境に、キキの心情を表す表現はなくなる。「大きく振って」から、ブランコだけではなく、おばあさんやお客さんなど、この世の全てのものを振り切ることを表現していると考えられる。「真っ暗な」は、即物的に会場の明るさを表現すると同

時に、一度きりしかできない、今までに成功したことのない技に命がけで挑戦する、キキの心情を表している。

ひどくゆっくりと、大きな白い鳥が滑らかに空を滑るように、キキは手足を伸ばしました。

「ひどく」という程度がはなはだしい様を表す副詞を用いることによつて、キキの一举一動に対して、読者に緊張感を持たせている。また、冒頭部分で観客がキキを喻えた「鳥」を、ここでの比喩に用いることによつて、読者の視点を観客からの視点に置き換える効果がある。「白い大きな鳥」は結末部分で再び現れるが、その鳥がキキであることを連想させるための布石であるとも捉えられる。

人々のどよめきが、潮鳴りのように町中を揺るがして、その古い港町を久しぶりに活気づけました。

「どよめき」は、大勢の人が思わず上げる声で、辺りがざわめく様子である。「潮鳴り」は、遠くから響きわたってくる潮の音である。「港町」という設定の中で、「ざわめき」を「潮鳴り」という関連のある言葉にたとえることで、より効果的な比喩表現となっている。また、それまで「ある港町」「その港町」としか表現されていなかったにも関わらず、「古い」と修飾されている。「活気」と対照に近い「古い」と、「久しぶり」という表現を用いることで、港町の活気づけられた振れ幅がより大きく感じられる。

でもその時、誰も気づかなかつたのですが、キキはもうどこにもいなかったのです。

「でも」は前文を受け、逆説的な展開になることを示す役割を果たしている。「その時」は直前の観客が感動している時を指すのであろうが、具体的に四回宙返りを終えてからどこで消えたのかが明記されていない。これは、「誰も気づかなかつたのですが」の「誰も」のうちに読者も含ませ、読者を観客たちと同様、キキがどこに行ってしまったのか、分からない状況に陥らせる効果がある。また、「のです」より、作者が強く表現したかつた部分だとも考えられる。

翌朝、サーカスの大テントのてっぺんに白い大きな鳥が止まっついて、それが悲しそうに鳴きながら、海の方へと飛んでいったといいます。

「白い大きな鳥」は、キキを表現する言葉の一つ。「悲しそうに鳴きながら」というのは、実際にその鳥が「悲しい」と思つて鳴いたのではなく、その鳥の鳴き声を聞いた者の主観的な印象である。「といひます」は伝聞調の表現であり、それを見たのは作者でも読者でもない。直後の文に、「それがキキだったのかもしれない」と書かれていることから、ある街の人が白い鳥を見てキキを連想し、その鳴く姿を「悲しい」と捉えた可能性もある。直後に「町の人々はうわさして」いたことから、キキが失踪したことは、町の人々に伝わっていることが分かる。しかしながら、「白い大きな鳥」からキキを連想した人が、なぜ「悲しそう」に鳴いていると捉えたかは大きな疑問である。単純に四回宙返りを成功させた人間が、失踪したとはいえ「悲しい」という感情を持つていると町の人々が考えるのは不自然だ。ではおばあさんとのやり取りを町の人々が知っていればどうか。おばあさんとのやり取りを聞いた町の人がいるとは考えにくい。聞いていたのはほかでもない読者である。この文から、作者は読者に、キキは薬によつて四回宙返り

を成功させた代償に鳥になり、悲しい感情を持っているという印象を植え付けたかったのではないかと考えられる。それがなぜ「悲しい」のかは、読者の想像に委ねられる。

三 考察

▼先行論

五十嵐淳「境界の物語」として「空中ブランコ乗りのキキ」を読む」（科学的「読み」の授業研究会、『研究紀要』七、二〇〇五年、三五―四一頁）より

「キキ」を読み解くキーワードの一つは「境界」である。それはある世界と他の世界のいさかいのことである。したがって、そこには、あるひとつの世界の限界や究極があったり、互いに接するふたつの世界の特徴が混在したりする。そしてそれは、際立った相反する特徴の混在であったり、逆にどちらの特徴とも言えない曖昧さであったりする。

「キキ」は境界の物語にふさわしい条件を備えている。（中略）

神業とも言える四回宙返りを目の当たりにした驚きや感動とともに、死の不安や「負い目」から解放された安堵感も感じられる。

しかし、この強い感動・感激のベクトルはキキに向いていない。「辺りにいる人々と、肩をたたき合いました」と書かれているばかりである。彼らは港町の人々同士で、神業を目にすることができた感動を共有しあい、死の不安からの解放感を共有しあい、ともにこの場にいることの連帯感や一体感を味わっているのである。

(一) 境界人の孤独

五十嵐の先行論にもある通り、キキと波止場のおばあさんは、生と死や、現実世界と異界といった境界にたたずむ人物たちである。両者とも、作中を見ればわかる通り、理解者がいない孤独な存在として分かる。キキの周りには、団長さん、ロロ、お客さんと言った人物たちが登場する。しかし、誰一人として、キキと感情を共有し合えるような者はいない。団長さんはキキに、簡単に四回宙返りを勧めている。

ロロは、キキと全く逆の生き方であり、共感等到底不可能である。さらに、親身になって、キキを制止しようとしているのであれば、少々強引にでも引き留めることはできたはずだ。そして、お客さんに関しては、五十嵐の主張にもあるが、感動の対象はあくまで四回宙返りの成功に立ち会えたことなのである。それは、ピピの三回宙返り成功の知らせを聞いた時に、港町の人々が湧いたことを考えれば実に容易く理解できる。お客さんにとってキキは、交代可能な存在だったのだ。

波止場に現れたおばあさんは、「やせた」と表現されている。また、「かたわらの小さなテント」を所有していることから、テント暮らしであることが分かる。つまり、非常に貧しく、他の人たちとは住む場所が違うのである。また、決定的な論拠は原作にある。元々、原作において、このおばあさんは、「乞食のおばあさん」と表現されていたのである。つまり、両者は互いに孤独な存在として共感をし、最後の四回宙返りの際には、キキをして『あのおばあさんも、このテントのどこかで見ているのかな……。』と思わせしめたほどの影響力であった。

(二) 閉鎖空間に生きたキキの心的成長

キキは、幼いころからサーカス団内という、非常に限られた空間での生活であった。その為、一般的に常識とされるような考え方や身についておらず、逸脱したそれを手にするに至っている。また、キキは、作中に具体的な年齢が書かれている訳ではないが、描写を見ると、中世的な若い青年といった印象を受ける(そもそも女性が男性か、という議論はここでは割愛させていただく)。

閉鎖空間の中で育つ少女を描いた作品として、太宰治の『魚服記』がある。当該作品内では、スワは小さな村のはずれに父と二人きりで生活をする様子が描かれている。ある日、一人の学生が、その近くを流れる滝に転落し、死んでしまったことから物語は始まっていく。ここに描かれるスワという少女は、社会性に乏しく、外的刺激がほとんど無いと言ってよい。その為、他二人の登場人物から受ける影響力は、スワにとって非常に比重の高きものとなっているのである。つまり、閉鎖空間内では、限られた周囲の人物の言動によって、当該人物の心的変化及び成長は起こるのである。

キキにおいても、団長さんやロロ、そして波止場のおばあさんといった、たった数人の言動による影響は凄まじい。特にロロは、「いいじゃないか。人気なんて落ちたって死にやしない。ブランコから落ちたら死ぬんだよ。いっそ、ピエロにおなり。ピエロなら、どこからも落ちやしない。」という、ピエロになる選択肢など持ち合わせていないキキに対する、全く心無い言動によって、キキに四回宙返りの実行を決断させてしまっている。しかし、実際は、キキ自身の気付きを促進したまのであると言える。当初、キキは、潜在的に、人の評価を自分のアイデンティティとして持ち合わせていたが、それを自覚まではしていなかった。それを、各人物たちとの対話によって顕在化させ

ているのである。そうして、最後にはその気持ちを自覚している。前項を踏まえるなら、波止場のおばあさんは、キキの気持ちをより理解できる立場として、最後に彼(女)の後押しをするに最適な存在であったと言えるのである。

